

調査報告 つくば市水守桜塚古墳2012年度発掘調査概要

著者	滝沢 誠, 宮内 裕子, 田代 恵美, 和泉 直樹, 山下 優介, 齊木 誠, 福田 誠
雑誌名	筑波大学先史学・考古学研究
号	25
ページ	81-95
発行年	2014-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00149870

調査報告

つくば市水守桜塚古墳 2012 年度発掘調査概要

滝沢 誠・宮内優子・田代恵美・和泉直樹
山下優介・齊木 誠・福田 誠

I. はじめに

つくば市水守桜塚古墳¹⁾は、茨城県南部を代表する前期古墳の一つである。本古墳が最初に注目されるようになったのは、開学後まもなく設立された筑波大学考古学研究会の学生有志が筑波町（当時）水守地区に「前方後方墳」らしき古墳が存在するとの情報をもたらしたことによる。その報告を受けた筑波大学の増田精一と岩崎卓也（ともに旧教員）は、本古墳が筑波地域の古墳時代史を解明する上できわめて重要な位置を占めるものと判断し、1979年3月、本古墳の本格的な発掘調査に着手したのである。

この調査では、大小14本のトレンチを設けて墳丘の調査をおこなうとともに、墳頂部に位置する埋葬施設の調査にも取り組んだ。その結果、当初の予想どおり、本古墳は墳丘長30m前後の前方後方墳であると考えられるようになった。また、長大な割竹形木棺を内蔵したとみられる墳頂部の粘土槨からは、変形四獣鏡1、石釧1、短剣1、刀子状鉄器1のほか、首飾り、手玉、足玉を構成する多数の玉類が出土した。さらに墳頂部の墓壙内からは、小型丸底土器を含む土師器の小片が出土した（蒲原・松尾1982）。

こうした調査結果から、桜塚古墳は古墳時代前期に造営された桜川中流域最古の有力古墳とみなされるようになり、東日本の多くの地域と同様に、当地域でも最初に築かれた有力古墳は前方後方墳であるとの理解が定着していった。また、その後の調査が進む中で、桜塚古墳に後続する周辺の有力古墳が時期ごとに造営場所を移動しているとの認識が深まり、当地域は古墳時代の地域首長権が輪番的に継承されたことを示す典型的事例と目されるようになったのである（岩崎1989・1990）。

以上のような調査・研究が進められてきた桜塚古墳については、発掘調査から30年以上が経過した現在にいたるまで正式な発掘調査報告書が刊行されていない。また、その認識が定着したかに思える桜塚古墳の墳丘形態と規模については、じつのところ確たる証拠が得られているわけではないのである。

筑波大学では、上記の課題をあらためて認識しつつ、まずは古墳の形態と規模を詳しく把握することを目的とし、2012年度に33年ぶりとなる桜塚古墳の発掘調査を実施した。本稿は、その調査概要を記したものである。なお、発掘調査は、筑波大学人文・文化学群人文学類の「考

古学実習」ならびに同大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻の「先史学・考古学基礎実習」をかねて、2012年11月23日～12月14日の計18日間実施した。調査担当者(実習担当者)および調査参加者は以下のとおりである。

調査担当者：滝沢 誠(筑波大学人文社会系・准教授)

常木 晃(筑波大学人文社会系・教授) *実習担当者

調査参加者：宮内優子，田代恵美，和泉直樹(筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻)，丸川尚子，奥山 香，加藤千里，橋内沙稀，小島 希，佐藤弘紀，山下優介，明石萌子，恵羅純加，齊木 誠，佐々木雄大，田中直樹，谷口佳鈴，平間克明，福田 誠，近藤彰彦(筑波大学人文・文化社会学群人文学類)

(滝沢 誠)

II. 古墳の位置と環境

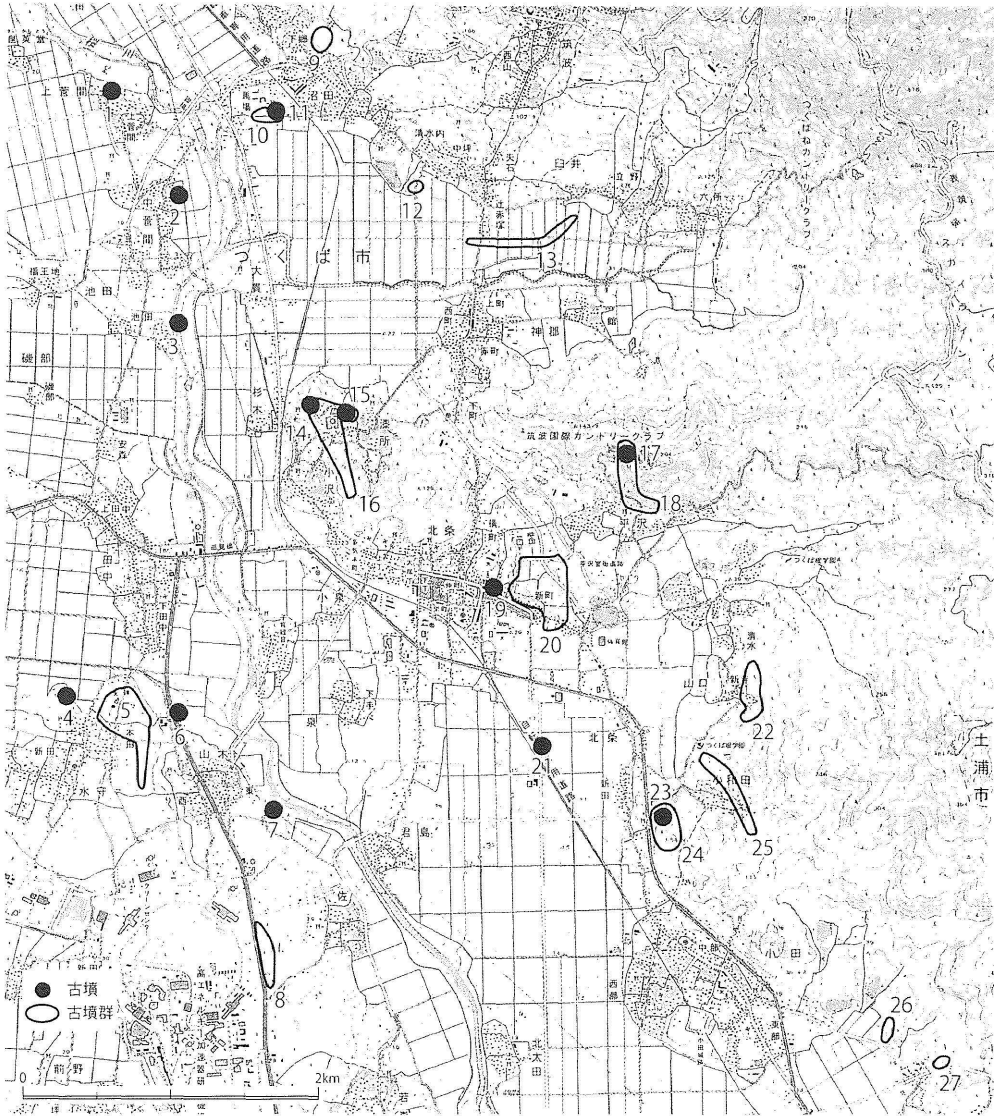
桜塚古墳は、茨城県つくば市水守709番地ほかに所在する。本古墳が所在するつくば市は、1987年(昭和62)に大穂町・豊里町・谷田部町・桜村の4町村が合併して誕生した。その後1988年(昭和63)に筑波町，2002年(平成14)に荃崎町が加わり，北は筑波山，南は牛久沼までの南北約30km，東西約15kmの大きな市域を有する。

市域の地形は，北に標高877mの筑波山を中心とする筑波山地がひろがり，その西側には市域を南北に貫くように一級河川の桜川が流れる。桜川の右岸には標高20～30mの筑波台地がひろがり，南北に長く延びている。その北東縁部には北に向かって舌状に突き出るいくつかの小台地縁が認められ，本古墳はそれらの一つを構成する舌状台地先端部の標高約25m，平野との比高差約10mの地点に位置する(第1図4，以下図中の番号のみを示す)。

現在つくば市には多くの遺跡の存在が確認されており，古墳については110古墳群(単独墳を含む)，約440基が把握されている(石橋2010)。そのうち，つくば市北東部における古墳の分布は，桜川東岸にあたる筑波山麓，桜川に沿った低地，桜川西岸の筑波台地に大きく三分することができ，その中でも本古墳の所在する桜川西岸の筑波台地は，茨城県内において前期古墳が集中する地域として知られている。

本古墳より500mほど東の舌状台地上には，前期古墳として知られる山木古墳(6)，また山木古墳と本古墳の中間に位置する水守古墳群(5)が存在する。山木古墳は，1968年(昭和43)に筑波研究学園都市学園東大通りの道路工事のために緊急発掘調査が行われた墳丘長48mの前方後円墳で，その築造年代は古墳時代前期末とされている。また，水守古墳群では墳丘径32mと35mの円墳2基が確認されており，それらの築造年代は古墳時代中期前半と考えられている。

一方，桜川の東岸に目を向けると，つくば市北条地区を中心に，沼田古墳群(10)，漆所古墳群(16)，北条中古墳群(20)，平沢古墳群(18)，山口古墳群(22)，甲山古墳群(24)など，筑波山系の山裾をめぐるように点々と古墳群が認められる。



第1図 桜塚古墳と周辺の古墳
(国土地理院発行 2万5千分の1地形図「筑波」及び「上郷」をもとに作成)

1. 上管間赤洲古墳 2. 中管間稲荷塚古墳 3. 池田古墳 4. 水守桜塚古墳 5. 水守古墳群 6. 山木古墳
7. 山木坊ノ下古墳 8. 山木古墳群 9. 国松東坪古墳群 10. 沼田古墳群 11. 八幡塚古墳
12. 白井燈ヶ池古墳群 13. 白井古墳群 14. 土塔山古墳 15. 漆所大塚山古墳 16. 漆所古墳群
17. 平沢1号墳 18. 平沢古墳群 19. 北条八坂神社古墳 20. 北条中台古墳群 21. 北条大塚古墳
22. 山口古墳群 23. 甲山古墳 24. 甲山古墳群 25. 小和田古墳群 26. 小田古墳群 27. 大形古墳群

沼田古墳群は、筑波山南西麓から延びる台地上に立地し、墳丘長約 90 m の前方後円墳である八幡塚古墳 (11) を主墳とする。八幡塚古墳では、1979 年 (昭和 54) に茨城大学が墳丘整備にもなう発掘調査を実施している。同古墳は、桜川中流域最大規模の前方後円墳であり、出土した埴輪などから古墳時代後期前半の築造と考えられている。

漆所古墳群 (16) は、筑波山南西麓に位置する城山丘陵とその北側段丘上に立地し、墳丘長 61.3 m の前方後円墳である土塔山古墳 (14) を主墳とする。本古墳群には、土塔山古墳のほかに、前方後円墳 2 基、円墳 2 基、墳形不明の古墳数基が認められる。土塔山古墳については、1980 年 (昭和 55) に筑波大学が測量調査を実施しており、その墳丘形態から古墳時代中期後半頃の築造と考えられている (北内 1982)。

平沢古墳群 (18) は、筑波山南西麓に位置する城山丘陵の南東側に立地する。本古墳群では、長辺約 35 m 長方形墳丘と複室構造の横穴式石室を有する平沢 1 号墳 (佐都ヶ岩屋古墳: 17) のほか、3 基の小型古墳が確認されており、いずれも終末期古墳と考えられる (寺内 1982)。

山口古墳群 (22) は、筑波山南麓に位置する宝篋山の西側に立地する。横穴式石室を内蔵する円墳 2 基が確認されており、1 号墳には畿内系の片袖式横穴式石室が認められる (寺内 1982)。

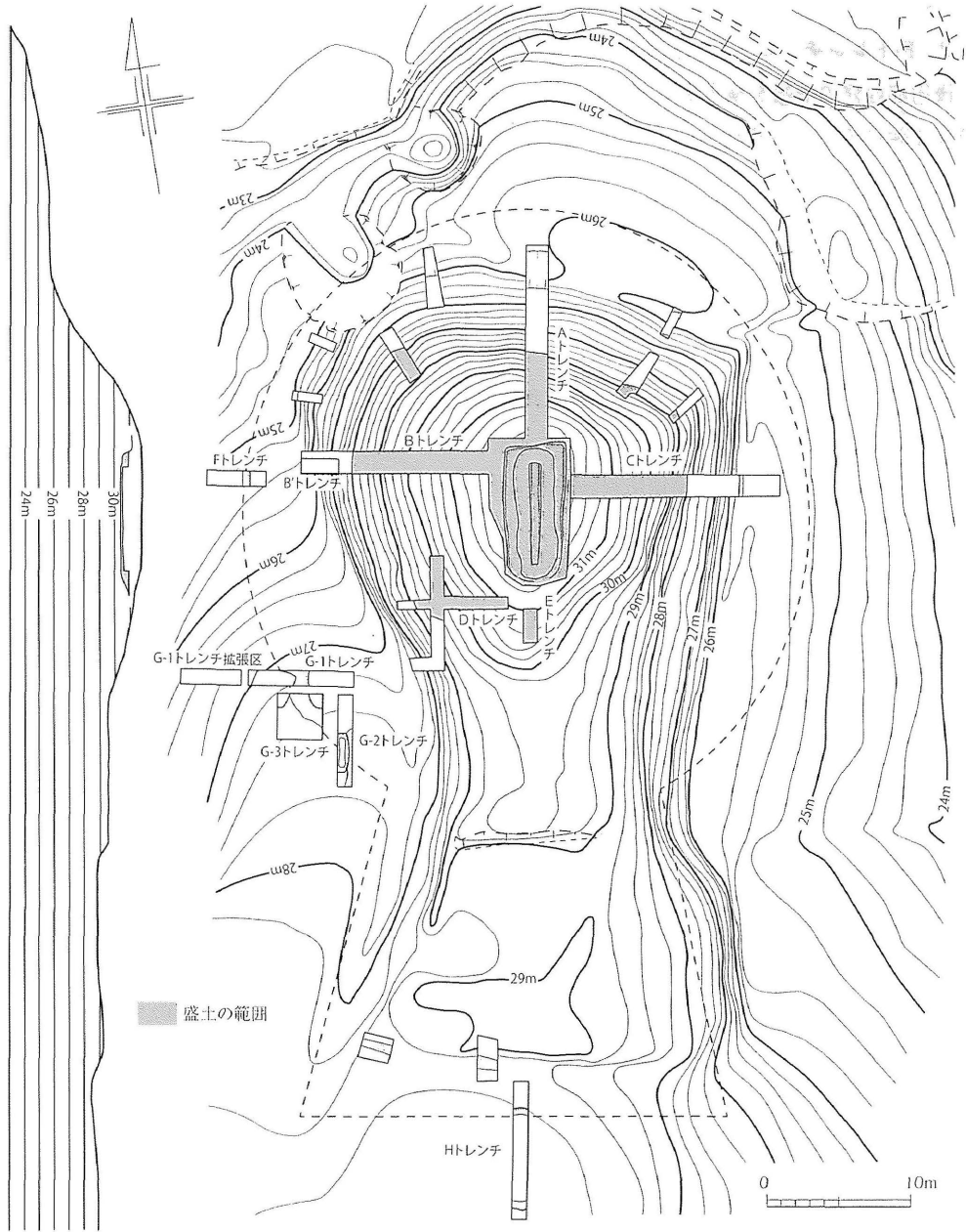
甲山古墳群は、筑波山南麓の段丘上に立地する。5 基の古墳が確認されており、群中最大の甲山古墳については、1984 年 (昭和 59) に筑波大学が発掘調査を実施している。同古墳は、直径約 30 m の円丘を有するが、前方後円墳であった可能性もある。墳頂部からは 2 基の箱形石棺が検出されており、その年代は古墳時代後期前半と考えられる。 (田代恵美)

Ⅲ. 調査の概要

1. 古墳の現状 (第 2 図) ²⁾

桜塚古墳の現状については、1979 年の調査当時と比べて大きな変化はなく、前方部に設けられた墓地を除く部分は、全体が雑木に覆われている。また、墳丘の西側に沿うように道路 (未舗装) がつうじるなど、ほぼ南北に主軸をおく墳丘の斜面は多くの部分で急傾斜をなし、全体として少なからぬ改変を被っている状況が認められる。

今回の調査では、桜塚古墳の墳丘形態と規模を把握することを目的に、墳丘の西側と南側の合計 3 地点でトレンチ調査を実施した。1979 年の調査では、後円部のトレンチ調査によって確認された盛土の範囲を墳丘と理解しているが、見かけ上の墳丘 (全長約 60 m) は盛土が確認された高さよりもさらに下方につづいている。すなわち、盛土部分に加えて地山を削り出した墳丘が存在している可能性も十分に予想されることから、今回の調査では見かけ上の墳丘裾部にねらいを定めて調査区を設定することとした。ただし、現在残る墳丘の下部は急傾斜をなしている部分が多く、後世の改変を被っている可能性が高いと判断されたため、墳丘の西側については、本来の形状に近いとみられる墳丘上部の傾斜から裾部の位置を想定して、後円部側 (F トレンチ) とくびれ部付近 (G トレンチ) に調査区を設定した。 (滝沢 誠)



第 2 図 つくば市水守桜塚古墳調査概要図 (S=1:500)

2. F トレンチ

後田部西側の墳端を検出することを目的に、幅 1.0 m、長さ 3.0 m の F トレンチを設定した。墳丘主軸に直交する東西方向のトレンチで、最終的には西側に 0.9 m に拡張し、あわせて 1.0 m × 3.9 m の範囲を掘り下げた。その結果、トレンチの東端より西へ 1.0 m 進んだ地点の地表下約 40cm、標高 25.1 m から地山が下降し始め、そこから 0.5 m 西へ進んだ地点の地表下約 65cm、標高 24.8 m で再び平坦面に移行していることが明らかとなった。このわずかに残った傾斜面は、覆土の堆積状況からみて後世の改変によるものとは考えられず、地山を削り出した墳丘の裾部（墳端）である可能性が高い。

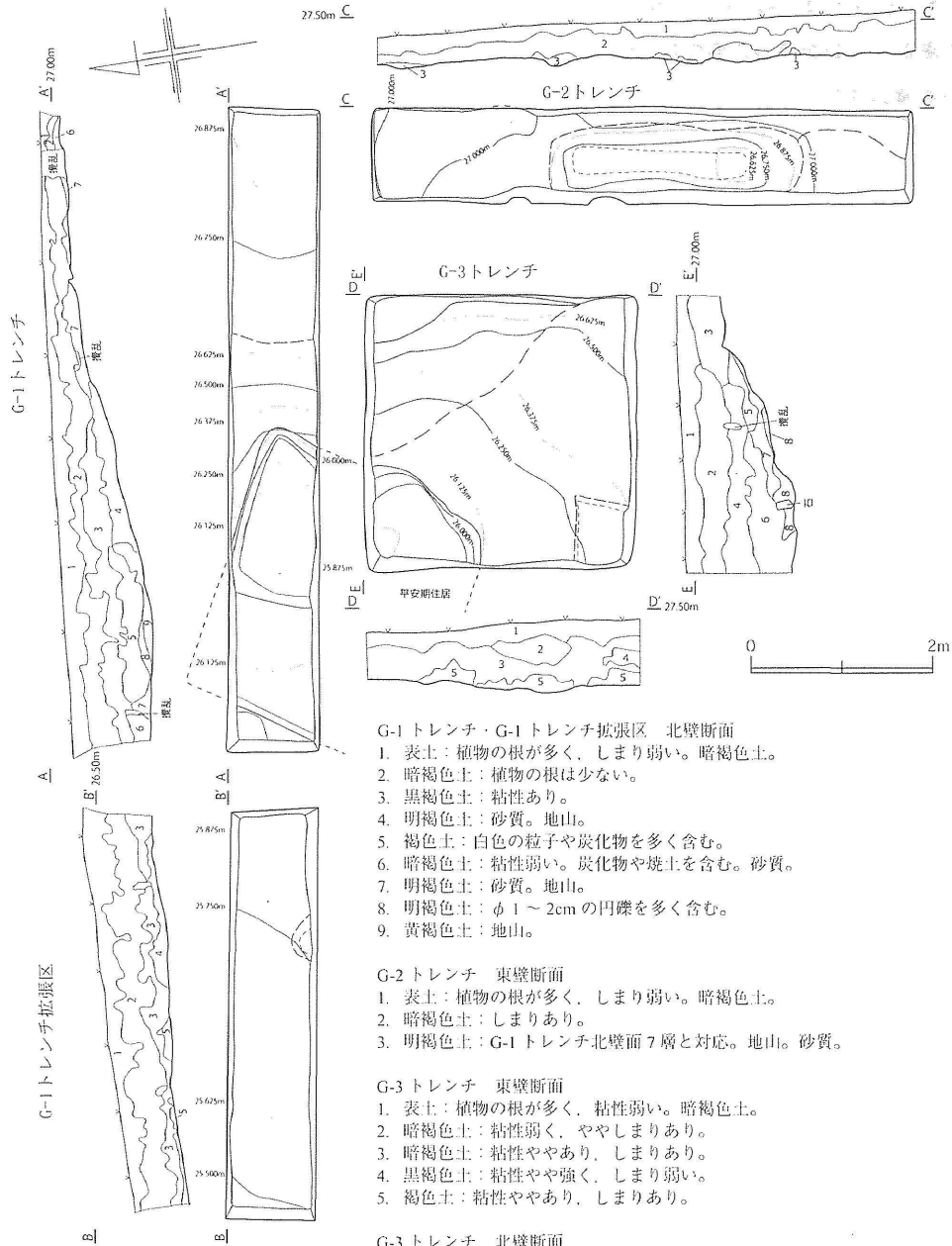
F トレンチの調査にあわせて、第 1 次調査時の B トレンチを確認するために、それと重複するかたちで幅 1 m、長さ 2.5 m の B トレンチを設定した。今回調査した F トレンチの北壁は、道路を挟んで B トレンチの南壁に対応することから、両者の堆積状況を連続的に把握するために B トレンチの西側部分に設定したトレンチである。調査の結果、B トレンチの一部を検出したが、この部分の地山は急斜面で凹凸が激しく、後世の改変を被っていることが明らかであった。（和泉直樹）

3. G トレンチ（第 3 図）

くびれ部の検出を目的とし、墳丘西側に G-1 トレンチおよび G-2 トレンチを設定した。また、調査の状況にあわせ、墳裾の形状や周溝の有無を精査すべく、あらたに G-1 トレンチを西側へ延長した G-1 トレンチ拡張区および G-3 トレンチを設定した。

G-1 トレンチは、幅 1.0 m、長さ 7.0 m の調査区で、墳丘主軸に直交する東西方向のトレンチである。トレンチの東端では 30cm ほど掘り下げた標高 26.9 m 付近で地山とみられる黄褐色土を検出したが、そこから 3 m ほど西に進んだ地点で地山の落ち込みが認められた。この落ち込みを地山削り出しによる墳裾部と想定して掘り下げを進めたところ、地山はさらに西側へ向かって緩やかに傾斜することが確認できた。この傾斜面は、トレンチ東端より約 3.5 m、標高約 26.6 m の地点で終わり、平坦面に移行するとみられるが、その端部は平安時代の竪穴住居によって完全に失われていた。

G-1 トレンチで検出された上記の傾斜面は周溝の内縁部である可能性も考えられたため、G-1 トレンチをさらに西側へ延長し、周溝外縁部の有無を確認することとし、G-1 トレンチから西へ 0.5 m 離れた地点より、幅 1.0 m、長さ 4.0 m の G-1 トレンチ拡張区を設定した。調査の結果、周溝の外縁部とみられる立ち上がりは確認されず、地山は西側に向かって緩やかに傾斜していくことが確認された。この G-1 トレンチ拡張区のすぐ西側は、古墳が立地する舌状台地の西側斜面に移行していることから、少なくとも墳丘の西側には周溝は存在せず、G-1 トレンチで検出された傾斜面は、地山を削り出した墳丘の裾部（墳端）である可能性が高いと考えられる。



G-1 トレンチ・G-1 トレンチ拡張区 北壁断面

1. 表土：植物の根が多く、しまり弱い。暗褐色土。
2. 暗褐色土：植物の根は少ない。
3. 黒褐色土：粘性あり。
4. 明褐色土：砂質。地山。
5. 褐色土：白色の粒子や炭化物を多く含む。
6. 暗褐色土：粘性弱い。炭化物や焼土を含む。砂質。
7. 明褐色土：砂質。地山。
8. 明褐色土：φ 1～2cm の円礫を多く含む。
9. 黄褐色土：地山。

G-2 トレンチ 東壁断面

1. 表土：植物の根が多く、しまり弱い。暗褐色土。
2. 暗褐色土：しまりあり。
3. 明褐色土：G-1 トレンチ北壁面 7 層と対応。地山。砂質。

G-3 トレンチ 東壁断面

1. 表土：植物の根が多く、粘性弱い。暗褐色土。
2. 暗褐色土：粘性弱く、ややしまりあり。
3. 暗褐色土：粘性ややあり、しまりあり。
4. 黒褐色土：粘性やや強く、しまり弱い。
5. 褐色土：粘性ややあり、しまりあり。

G-3 トレンチ 北壁断面

1. 表土：植物の根が多く、粘性弱い。暗褐色土。
2. 暗褐色土：粘性弱く、ややしまりあり。φ 1cm 程度の礫を含む。
3. 暗褐色土：粘性ややあり、しまりあり。
4. 暗褐色土：暗褐色土と黒褐色土の混土层。白色の φ 1～3cm の礫を含む。
5. 褐色土：粒子がきめ細かい。白色の粒子を含む。砂質。
6. 褐色土：白色の細かい粒子を含む。砂質。
7. 明黄褐色土：粒子がきめ細かい。砂質。
8. にぶい赤褐色：焼土を含む。
9. 明褐色土：砂質。地山。

第 3 図 G トレンチ平面図・断面図 (S=1:80)

G-2 トレンチは、幅 1.0 m、長さ 6.0 m の調査区で、墳丘主軸に平行する南北方向のトレンチである。トレンチの北側では、G-1 トレンチで確認された傾斜面につながる地山の緩やかな傾斜が確認された。また、トレンチの北端から 3.0 m ほど南に進んだ地点では、後世のものと思われる長楕円形の落ち込みが検出され、その東縁部とトレンチ東壁の間には西側に落ち込む南北方向のわずかな傾斜面が認められた。この傾斜面の位置は浅く、前方部側縁部にかかわるものとの確認は得られなかった。なお、本トレンチの南端部付近からは、パレススタイル壺の口縁部片が出土した。

G-3 トレンチは、幅 3.0 m、長さ 3.0 m の調査区で、G-1 トレンチで確認された墳裾部とみられる傾斜面の連続性を把握するため設定した。その結果、トレンチの北東側で緩やかに弧を描くように地山を削り出した傾斜面が検出され、G-1・G-2 トレンチの傾斜面と接続する状況が確認された。また、この傾斜面よりも西側は、G-1 トレンチの場合と同様に西側に向かって緩やかに傾斜していくことが確認された。

そのほか、G-3 トレンチの北西隅では、G-1 トレンチで確認された平安時代の竪穴住居跡の南側部分が検出された。これに G-1 トレンチで検出された東西壁のラインをあわせて復元すると、全体としては南北約 2.5 m × 東西約 2.8 m の方形の竪穴住居跡であると推測される。なお、竪穴住居跡の東壁にあたる部分ではカマドの一部（立石）と焼土のひろがり確認されたが、大半が土層壁の中に位置していたため全体を把握するにはいたらなかった。この竪穴住居跡はトレンチ北東側で検出された傾斜面を一部破壊しているが、同時にその上部に堆積した土層を掘り込んでいることから、本トレンチで検出された傾斜面は、地山を削り出した古墳本来の裾部とみることができる。なお、竪穴住居跡の覆土中からは土師器 4 点が出土し、カマド付近からは雲母片岩（筑波石）の破片が出土した。（田代恵美）

4. H トレンチ

墳丘の範囲と周溝の確認のため、前方部の南に東西 1.0 m、南北 9.0 m の H トレンチを設定した。トレンチは墳丘の主軸に沿い、主体部の中心からの距離は約 35 m である。地山までの堆積は浅いところで約 20cm、深いところで約 60cm であつた。トレンチの北端から約 0.4 m の地点までは攪乱を受け、70cm 以上の深さまでほぼ垂直に落ち込んでいた。その他の部分については、地山面に至るまで良好な自然堆積が認められた。

トレンチの北端から南に約 2.7 m の地点では、南に向かって約 1.3 m の幅で高低差約 30cm の緩やかな傾斜面が検出され、それと対応するように、トレンチの南端から北に約 0.7 m の地点では、北に向かって約 1 m の幅で高低差約 30cm の傾斜面が検出された。この 2 つの傾斜面の間はほぼ平坦で、トレンチ南端から約 3 m の地点の堆積土下層からは、古墳時代前期に位置づけられる高坏または小型器台の脚部片が出土した。

以上のように、本トレンチでは、上端幅約 5.5 m、下端幅約 3.5 m、深さ約 30cm の幅広い溝状の落ち込みが検出された。その堆積状況や出土遺物から、この溝状の落ち込みは本古墳の前

方部前端を画した溝の一部と判断することができる。ただし、Gトレンチの状況が示すように、墳丘の側面には溝が巡らないとみられることから、本トレンチで検出された溝は、本古墳が立地する舌状台地の高位側（前方部前端側）にのみ直線的に掘られたものである可能性が高い。

（宮内優子）

IV. 出土遺物

1. 古墳時代前期の土器（第4図）

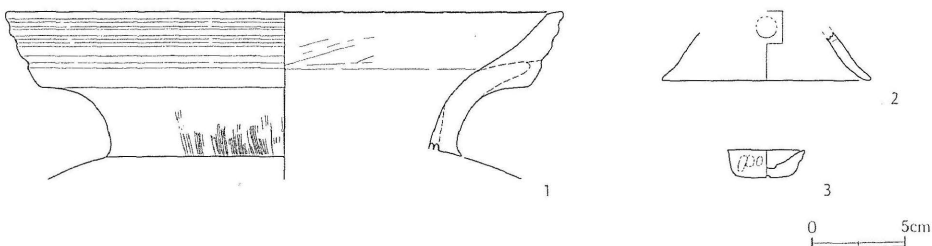
トレンチ内から出土した土器片のうち、器種の判別が可能な3点について報告する。

1は、有段口縁状をなす壺の口縁部片である。G-2トレンチ南側の地表面下40～50cmの深さより出土した。口縁部から頸部にわたる破片であり、口縁部全周の1/8程度が残存する。残存部の高さは7.8cmで、口径は約30cmに復元できる。口縁部外面に平らな面をつくり、その部分に3条の凹線文を施す。口縁部内面は、明らかに内湾しているが、文様は認められない。頸部下端に見られる体部との接合面の傾きにより、体部から外反して開く頸部の形状がうかがえる。器面調整は、頸部外面に縦位のハケ、口縁部外面にヨコナデを施している。口縁部内面には斜位のヘラミガキが認められる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明褐色である。また、胎土には雲母、石英、長石を含んでいることから、在地品と考えられる。

2は、高坏または小型器台の脚部片である。Hトレンチで検出された溝状落ち込み内の堆積土下層より出土した。脚端から透かし孔までの破片であり、坏部を欠損する。脚部全周の1/8程度が残存し、残存部の高さは2.6cmである。脚径は11.2cmに復元できる。脚中位に透かし孔を穿つ。器面調整は、外面にヘラミガキ、内面にナデを施すが、明瞭ではない。焼成は良好であり、色調は外面が黄褐色、内面が明褐色である。

3は手捏ね土器で、1と同様にG-2トレンチ南側の地表面下40～50cmの深さより出土した。底径は2.3cm、器高は1.5cmである。底部は厚みがあり、底部から口縁部にかけて開く形状である。外面と底部内面に指頭圧痕が認められる。底部全面には黒斑が認められ、全体の色調は明褐色である。

（山下優介）



第4図 古墳時代前期の出土遺物（S=1:4）

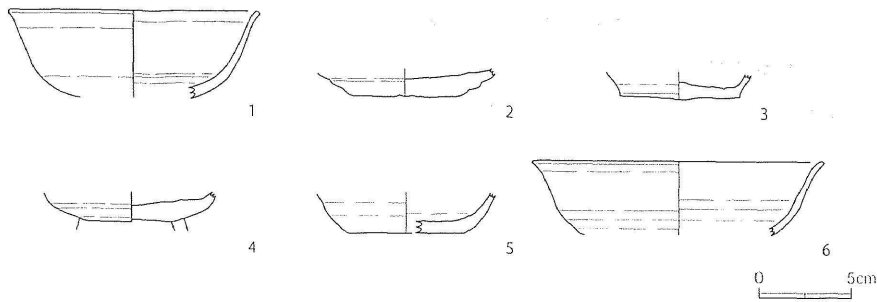
以上のうち、壺の口縁部片(1)は、外面に3条の凹線文が施されていることから、東海西部で発達した所謂パレススタイル壺の系譜を引くものと考えられる。このような東海西部系の装飾壺は、茨城県内では鹿島市木滝台遺跡(田口崇他1978)、同ふたご塚遺跡(黒沢1981)、かすみがうら市松延遺跡(黒沢1981)、小美玉市権現平2号墳(伊東1994、古屋2006)、下妻市下栗野方台遺跡(黒澤2001、玉井1993)、土浦市北西原遺跡(赤坂2002、黒澤2001)、同神明遺跡(赤坂2002、吉澤・小野2002)で出土している。今回出土した壺は、胴部以下を欠損しているため詳しい内容は不明であるが、口縁内部の綾杉文がみられないことや口縁部に棒状浮文をともなう可能性もあることから、田口一郎の分類(田口1987)によるA形式Ⅲ類に該当するものといえよう。また、胎土も在地のものともみられることから、東海西部の要素を残しつつも在地化が進行した段階の所産と考えられる。この壺が本古墳にともなうものとみるならば、1979年の調査で出土した小型丸底土器(蒲原・松尾1981)の存在と考えあわせ、本古墳出土の土器群は、比田井克仁による編年(比田井2001)の南関東Ⅱ段階、廻間Ⅲ式併行期に位置づけられよう。(齊木 誠)

2. 平安時代の土器(第5図)

1から6は、Gトレンチより出土した6点の土師器である。1は内面黒色処理が施されたロクロ土師器坏、2はロクロ回転糸切り平底の土師器小皿で、いずれもG-1トレンチ第2層より出土している。3はロクロヘラ切り平底の土師器小皿で、G-1トレンチ竪穴住居跡内の地山直上より出土している。4は平底に高台貼り付け跡がある土師器坏で、G-2トレンチ内の深さ40cm程の地山直上より出土している。5はロクロ回転糸切り平底の土師器小皿で、G-3トレンチの表土より出土している。6はロクロ土師器坏であり、G-3トレンチの住居跡内焼土付近より出土している。胎土は長石と雲母を主体とし、2と3と6には石粒が熱を受けて赤くなった赤色斑粒が認められる。

以上のうち、1は内面黒色処理が施されていることから、糸切り導入後の再加工が施される段階のものであり、千葉県八千代市北海道遺跡から出土した「承和五年二月□」の墨書銘入り土師器坏との比較により、9世紀から10世紀前半の土師器坏とされているものである(阿部2006)。3は法量と器形より、比毛君男の分類による中世Ⅰ期(12世紀～13世紀前半)の皿類に該当すると考えられる(比毛2009)。また、茨城県土浦市入ノ上遺跡の平安時代末期の竪穴住居跡内より類似の土師器が出土しており(土浦市遺跡調査会1997)、それらとの比較によれば、3は11世紀から12世紀の土師器であると推察される。

出土地点より3の土師器の年代比定を重視すれば、Gトレンチで検出された竪穴住居跡の年代は11世紀から12世紀であると考えられる。この竪穴住居跡は一辺が3m弱の小型で方形を呈していると推定され、床面中央部には筑波石とともに若干の焼土跡がみられる。こうした竪穴住居跡の特徴は、つくば市柴崎遺跡Ⅱ区編年(茨城県教育財団1991)の第Ⅷ期(12世紀)に該当し、3の土師器の年代観とも齟齬はないと思われる。(福田 誠)



第5図 平安時代の出土遺物 (S=1:4)

V. まとめ

1. 墳丘の形態と規模

今回実施した再調査の結果、桜塚古墳の墳丘形態と規模は従来の認識と大きく異なるものであることが明らかとなった。すなわち、桜塚古墳は従来考えられてきたような墳丘長 30 m 前後の前方後方墳ではなく、墳丘長約 59 m の前方後円墳であるとみられる。

墳丘の形態については、F トレンチと G トレンチで検出された地山削り出しによる傾斜面の存在が重要である。これまで桜塚古墳の墳丘形態については、1979 年の調査で検出された盛土の範囲が主丘部において矩形にめぐることから、前方後方墳であろうとの認識が示されてきた。しかし、墳丘の現状をみる限り、盛土端が位置する標高 29 m 付近では墳丘面の大半が急傾斜をなして、本来の形状をとどめているとは考えにくい。その一方で、地山の傾斜はさらに下方につづき、F トレンチと G トレンチで検出された地山の傾斜面はその裾部をなすものと考えられる。これを古墳本来の裾部とみるならば、両トレンチで検出された傾斜変換線（墳端）の位置と走向から、主丘部の平面形は円形に復元される。G トレンチでくびれ部を検出できなかった点に憾みはあるが、こうしたあらたな事実にもとづく限り、桜塚古墳は前方後円墳と考えるのが妥当であろう。

以上のように、桜塚古墳の墳丘は、その下半部に地山削り出しの部分をとともなうものとみられる。当然のことながら、そうした見方は墳丘規模の認識にも大きな変更をもたらすことになる。そのことを裏付けるように、これまで主丘部側の盛土検出レベルを基準として推定してきた前方部の範囲は、H トレンチで検出された溝状の落ち込みにより、現在の墓地の南側まで延びていることが明らかとなった。この溝状の落ち込みは、桜塚古墳が立地する舌状台地の高位側側のみ掘削されたものとみられ、その内縁部は墳丘の裾部に相当するものと考えられる。その下端（墳端）を前方部側の基準とし、F トレンチと G トレンチで検出された墳端から後円部の規模を復元すると、桜塚古墳の墳丘規模は、墳丘長約 59 m、後円部径約 39 m となる。

2. 出土土器の編年的位置

出土遺物の中でもっとも注目されるのは、G-2 トレンチから出土したパレススタイル壺の口縁部片である。桜塚古墳では、以前の調査で墳丘下から竪穴住居跡が検出され、弥生時代後期の土器片が少なからず出土している。その一方で、古墳時代の竪穴住居跡などは一切検出されておらず、古墳時代に属する土器片の出土はごく少量にとどまっている。これらの事実を勘案するならば、今回出土した古墳時代前期の土器は、いずれも桜塚古墳にともなう可能性が高いと考えられよう。

そこで問題となるのは、パレススタイル壺の編年的位置づけである。濃尾地方に出自をもつこの壺の変遷については、文様の消失や形骸化の方向をたどりつつ廻間Ⅲ式1段階をもって終焉を迎えるものとされている（赤塚 1990）。また、東日本への波及については、濃尾地方における存続時間幅を逸脱することはないとの見方も示されている（比田井 2001）。今回の出土品は、破片のため全形を知り得ないものの、口縁部内面文様帯を欠いた在地品とみられるもので、同種の壺の中で終末段階に位置づけられるものであろう。

桜塚古墳では、以前の調査で墳頂部の墓室内から小型丸底土器が出土している。畿内地方を出自とする小型丸底土器は、パレススタイル壺よりも遅れて関東地方に波及するが、廻間Ⅲ式併行期には在地の土器組成に加わるようになる。ただし、桜塚古墳から出土した小型丸底土器には口縁部が発達したのも含まれており、同種の土器の中では形態が安定化した段階のより後出的な傾向も見受けられる。

以上を総合すると、桜塚古墳出土土器の編年的位置は、廻間Ⅲ式併行期の中に求めることができる。具体的には、在地化したパレススタイル壺の終末と典型的な小型丸底土器の波及が重なり合う時期とみられ、廻間Ⅲ式併行期の中で著しく遅れた時期にはならないと考えられる。とすれば、かつて「4世紀末を前後する時期」（蒲原・松尾 1981：27頁）とされた桜塚古墳の年代については、相応の見直しが必要となろう。

3. 今後の課題

今回の再調査により、桜塚古墳の墳丘形態と規模は大幅な見直しを迫られることとなった。しかしながら、その根拠となる調査地点はなお一部にとどまっており、とくに墳丘東側の裾部に関する知見はまったく得られていない。また、墳丘長の把握にかかわる後円部後端の位置も明らかではない。今後は、これらの解明を中心に墳丘の調査を進めていく必要があるだろう。

いずれにせよ、桜塚古墳が前方後円墳とみられるようになったことの意味は大きい。この間、東日本の各地域で最初に築かれた有力古墳は前方後方墳であるとの認識が定着してきたものの、近年ではより古く遡る前方後円墳の存在も散見されるようになった。その点では、桜川中流域に桜塚古墳をさらに遡る未発見の前方後円墳が存在するのか、あるいは当地域の有力古墳は前方後円墳をもって始まるのか、というあらたな問題が浮上してきたといえよう。それは、当地域に出現した古墳時代有力層の政治的性格にかかわる大きな問題である。

桜塚古墳に関する新知見は、前期古墳の墳丘形態をめぐる議論（日高 1998、塩谷 2000 など）にも一石を投じるものである。今回の調査結果により復元される桜塚古墳の墳丘形態は、後門部径：前方部長がほぼ 2：1 で、前方部が短く開くという特徴をもつ。くびれ部などが検出されていないため、前方部幅についての比較はできないものの、これと類似した特徴をもつ前期前方後円墳としては、筑西市灯火山古墳（瀬谷 1990）、つくば市山木古墳（上川名ほか 1972）、かすみがうら市田宿天神塚古墳（田中・日高 1996）、同熊野古墳（田中 1997）があり、それらは桜川流域から霞ヶ浦北岸にかけて分布している。一方、桜川下流域から霞ヶ浦南岸および北浦沿岸にかけては、土浦市王塚古墳（土浦市史編さん委員会 1975）、美浦村愛宕山古墳（高橋 1990）、同観音山古墳（大竹ほか 1981）、潮来市浅間塚古墳（茂木ほか 1980）、鹿嶋市伊勢山古墳（茂木・片山 1975、陣内 1982）などのように、前方部が開かず直線的な形態をもつ前期前方後円墳が分布している³⁾。こうした墳丘形態の違いがどのような系譜関係を示し、また、その分布域がどのような意味をもつのかについては、首長系譜のあり方（滝沢 1994）とも重ね合わせながら検討すべき重要な課題といえよう。

桜塚古墳では、埋葬施設や副葬品などについても検討すべき課題が数多く残されている。今回の調査成果を加味しつつ、それらについてもさらなる検討を進め、近い将来の最終的な研究報告を期すこととしたい。（滝沢 誠）

謝 辞

今回の調査に際しては、桜塚古墳の地権者の方々にご快諾をいただくとともに、水守地区の皆さんからは多方面にわたるご協力をいただいた。また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会には、調査の実施について全般的なご理解とご協力をいただいた。さらに現地では、1979 年の調査を指揮された岩崎卓也先生に親しくご指導をいただき、下記の諸氏からも有益なご助言をいただいた。末筆ではあるが、記して感謝を申し上げたい。

石橋 充、井坂敦実、大村冬樹、小野寿美子、塩谷 修、設楽博己、田中 裕、谷口陽子、長谷川敦章、日高 慎、前田 修、松尾昌彦、三宅 裕、山本賢一（五十音順・敬称略）

註

- 1) 埋蔵文化財としての登録名称は「水守桜塚古墳」（つくば市教育委員会 2001）であるが、本稿では通称として使用されてきた「桜塚古墳」の名称を用いる。
- 2) 1979 年調査の概報では掲載図面の方位を磁北で表示しているが（蒲原・松尾 1981）、本稿の掲載図面では真北で表示することとした。なお、桜塚古墳の測量図（第 2 図）については、部分的な補足・修正を加えつつ、1979 年調査当時のものを使用した。
- 3) 前方部が開かず直線的な形態をとるものの中には、前方部長が後門部径に迫るほど細長いものと（王塚古墳、伊勢山古墳）、前方部長が後門部径の 2/3 程度のもの（愛宕山古墳、観音山古墳、浅間塚古墳など）が存在し、細分が可能である。

参考文献

- 赤坂 亨 2002 「神明遺跡出土遺物の考察」『常名台遺跡群確認調査神明遺跡（第3次調査）』土浦市教育委員会 173-180頁。
- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 愛知県埋蔵文化財センター。
- 阿部義平 2006 『茨城県常総市国生本屋敷遺跡発掘調査報告〔特定研究〕東国の豪族居館』国立歴史民俗博物館研究報告 第129集 国立歴史民俗博物館。
- 石橋 充 2010 「つくば市域の古墳群」佐々木憲一・田中 裕編『常陸の古墳群』六一書房 233-267頁。
- 岩崎卓也 1989 「古墳分布の拡大」『古代を考える 古墳』吉川弘文館 36-72頁。
- 1990 『古墳の時代』教育社。
- 伊東重敏 1994 『権現平古墳群』玉里村埋蔵文化財調査報告第1集 玉里村教育委員会。
- 茨城県教育財団 1991 『研究学園都市計画桜崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）桜崎遺跡Ⅱ区中塚遺跡（上）』茨城県教育財団文化財調査報告第63集。
- 茨城県歴史館 1974 『古墳時代の茨城：豪族と民衆のすがた』。
- 大竹房雄ほか 1981 『塚原古墳群第1号墳（観音山古墳）調査報告書』美浦村教育委員会。
- 蒲原宏行・松尾昌彦 1981 「筑塚古墳」『筑波古代地域史の研究』筑波大学 21-27頁。
- 上川名昭ほか 1972 『茨城県筑波町山木古墳』茨城県考古学会。
- 北内三喜男 1982 「土塔山古墳」『筑波古代地域史の研究 昭和54～56年度文部省特定研究経費による調査研究概要』筑波大学 44-47頁。
- 黒沢彰哉 1981 「茨城県における古式土師器の問題」『婆良岐考古』第3号 婆良岐考古同人会 14-41頁。
- 黒澤春彦 2001 『第6回特別展 弥生から古墳へ』上高津貝塚ふるさと歴史の広場。
- 陣内康光 1982 「お伊勢山古墳」『宮中野古墳群発掘調査概報 昭和56年度』鹿嶋町教育委員会 5-7頁。
- 塩谷 修 2000 「霞ヶ浦沿岸の前方後円墳と築造規格」『常陸の前方後円墳（Ⅰ）』茨城大学人文学部考古学研究室 116-136頁。
- 瀬谷昌良 1990 『灯火山古墳確認調査報告書』明野町教育委員会。
- 高橋嘉朗 1990 「美浦村の古墳と古墳群」『美穂村史研究』第6号 美浦村教育委員会 27-46頁。
- 滝沢 誠 1994 「筑波周辺の古墳時代首長系譜」『歴史人類』第22号 筑波大学歴史人類学系 91-112頁。
- 田口一郎 1987 「パレス・スタイル壺の末裔たち」『欠山式土器とその前後 研究報告編』第3回東海埋蔵文化財研究会 95-112頁。
- 田口崇他 1978 『木滝台遺跡松山古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』日本考古学研究所。
- 田中 裕 1997 「茨城県千代田町熊野古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』第8号 筑波大学歴史・人類学系 107-117頁。
- 田中 裕・日高 慎 1996 「茨城県出島村田宿天神塚古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』第7号 筑波大学歴史・人類学系 83-106頁。
- 玉井輝男 1993 『下栗野方台遺跡』千代川村教育委員会。
- つくば市教育委員会 2001 『つくば市遺跡地図』。
- 筑波町史編纂専門委員会 1988 『筑波町史』上巻。
- 土浦市遺跡調査会 1997 『入ノ上遺跡：茨城県土浦市：都市計画道路田村沖宿線道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市教育委員会。
- 土浦市史編さん委員会 1975 『土浦市史』土浦市史刊行会。
- 寺内のり子 1982 『平沢・山口古墳群』筑波大学考古学研究会。
- 半澤幹雄 1997 「関東東部－千葉県内の事例を中心に－」窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』

- 真陽社 169-185 頁.
- 比毛君男 2009 「土浦市域の中世土器様相」『土浦市立博物館紀要 第 19 号』土浦市立博物館 1-20 頁.
- 比田井克仁 2001 『関東における古墳出現期の変革』雄山閣出版.
- 日高 慎 1998 「茨城県 前期古墳から中期古墳へ」『第 3 回東北・関東前方後円墳研究会〈シンポジウム〉前期古墳から中期古墳へ』東北・関東前方後円墳研究会 105-122 頁.
- 古屋紀之 2006 「茨城県玉里村権現平 2 号墳の再検討」『玉里村立史料館報』Vol.11 玉里村立史料館 89-103 頁.
- 増田精一・岩崎卓也ほか 1982 『筑波古代地域史の研究 昭和 54 ～ 56 年度文部省特定研究経費による調査研究概要』筑波大学.
- 水戸市教育委員会 2005 『台渡里廃寺跡－範囲確認調査報告書－』.
- 箕輪健一 2000 「茨城県における前期古墳の基礎的研究」『茨城県史研究』84 号 茨城県立歴史館 80-88 頁.
- 茂木雅博ほか 1980 『常陸観音寺山古墳群の研究』茨城大学人文学部史学第 5 研究室.
- 茂木雅博・片山 洋 1975 「常陸伊勢山古墳の墳形について」『古代学研究』第 76 号 20-23 頁.
- 吉澤 悟・小野寿美子 2002 『常名台遺跡群確認調査神明遺跡(第 3 次調査)』土浦市教育委員会.
- 渡辺 一 1997 「関東東部－千葉県内の事例を中心に－」窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社 277-290 頁.